

きりしとほろ上人伝

芥川龍之介

青空文庫

小序

これは予が嘗て三田文学誌上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所蔵の切支丹版「れげんだ・おうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人伝」は古来^{あまね}沿く歐洲天主教国に流布^{るふ}した聖人行状記の一種であるから、予の「れげんだ・おうれあ」の紹介も、彼是^{ひしあひま}相俟つて始めて全豹^{ぜんぱう}を彷彿^{ほうふつ}する事が出来るかも知れない。

伝中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が続出するが、予は原

文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削ひつさくをも施さない事にした。大方の諸君子にして、予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一 山ずまひのこと

遠い昔のことでおぢやる。「しりあ」の国の山奥に、「れぷろぼす」と申す山男がおぢやつた。その頃「れぷろぼす」ほどな大男は、御おんあるじ主の日輪の照らさせ給ふ天あめが下はひろしと云へ、絶えて一人もおぢりなかつたと申す。まづ身の丈は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓えびかづらかとも見ゆる髪の中には、いたいけな四十しじふか

雀らが何羽とも知れず巢食うて居つた。まいて手足はさながら深み山やまの松檜にまがうて、足音は七つの谷々にも跂こたまするばかりでおぢやる。さればその日の糧かてを獵あさらうにも、鹿熊などのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海べに下り立つて、すなごらうと思ふ時も、海松房みるぶさほどな髯ひげの垂れた顚おとがひをひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛たひも鰹かつをも尾鰭おびれをふるうて、ざはざはと口へ流れこんだ。ぢやによつて沖を通る廻船さへ、時ならぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫かこ楫かんどり取あわの慌あわてふためく事もおぢやつたと申し伝へた。

なれど「れぷろぼす」は、性しやうとく得こころね心根のやさしいものでおぢやれば、山そまずまひの柚獵かりうど夫は元より、往來の旅人にも害を加

へたと申す事はおりにない。反つて^{かへ}柚^{そま}の伐^きりあぐんだ樹は推し倒し、
 獵^{かりうど}夫の追ひ失うた毛物^{けもの}はとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷
 は肩にかけて、なにかと親切をつくいたれば、遠^{をちこち}近の山里でも
 この山男を憎まうずものは、誰一人おりなかつた。中にもとある
 一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さ
 りそのわらんべの親が家の引き窓を推し開くものがあつたれば、
 驚^{ねい}きまどうて上を見たに、箕^みほどな「れぷろぼす」の掌^{たなごころ}が、よく
 眠^{ねい}入つたわらんべをかいのせて、星空の下から悠々と下りて来た
 こともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映
 えではおぢやるまいか。

されば山^{やまがっ}賤^{がっ}たちも「れぷろぼす」に出合へば、餅や酒などを

ふるまうて、へだてなく語らふことも度々おぢやつた。さるほどにある日のこと、そま 杣の一むれが樹を伐らうずとて、ひやま 檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさのさと熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚たいて、徳利の酒を暖めてとらせた。その滴しづくほどな徳利の酒さへ、「れぷろぼす」は大きよろこに悦よろこんだけしきで、頭の中に巢食うた四十雀にも、杣たちの食はみ残いた飯をばらまいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、

「それがしも人間と生れたれば、あつぱれ功名手がらをも致いて、末は大名ともならうずる。」と云へば、杣たちも打ち興じて、

「ことわり道理かな。おぬしほどの力量があれば、城の二つ三つも攻め落さうは、かたてわざ片手業にも足るまじい。」と云うた。その時「れぷ

ろぼす」が、ちどもの案ずる体ていで申すやうは、

「なれどここに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山
ずまひのみ致いて居れば、どの殿の旗はたもと下に立つて、合戦を仕つかまつ
らうやら、とんと分別を致さうやうもござない。就いては当今天下
無双の強つはもの者と申すは、いづくの国の大将でござらうぞ。誰にも
あれそれがしは、その殿の馬前に馳はせ参じて、忠節をつくさうず
る。」と問うたれば、

「さればその事でおぢやる。まづわれらが量見にては、今天あめが下
に『あんちおきや』の帝みかどほど、武勇に富んだ大将もおぢやるまい
。」と答へた。山男はそれを聞いて、斜ななめならず悦びながら、

「さらばすぐさま、打ち立たうぞ。」とて、小山のやうな身を起おこ

いたが、ここに不思議がおぢやつたと申すは、頭の中に巢食うたしじふから四十雀が、一時にけたたましい羽音を残いて、空に網を張つた森の梢へ、こずゑ雛も余さず飛び立つてしまつた事ぢや。それが斜に枝を延のぼいた檜のうらに上つたれば、とんとその樹は四十雀が実のつたやうぢやとも申さうず。「れぷろぼす」はこの四十雀のふるまひを、いぶか訝しげな眼で眺めて居つたが、やがて又初一念を思ひ起いた顔色で、足もとにつどうたそま杣たちにねんごろな別をつけてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元来たやうにのしのしと、山奥へ独り往いんでしまつた。

されば「れぷろぼす」が大名にならうず願望がことは、間もなく遠近をちこちの山里にも知れ渡つたが、ほど経て又かやうなうはさ噂が、風

のたよりに伝はつて参つた。と申すは国ざかひの湖で、大ぜいの
 漁夫^{れふし}たちが泥に吸はれた大船をひきなづんで居つた所に、怪しげ
 な山男がどこからか現れて、その船の帆柱をむずとつかんだと見
 てあれば、苦もなく岸へひきよせて、一同の驚き呆れるひまに、
 早くも姿をかくしたと云ふ噂ぢや。ぢやによつて「れぷろぼす」
 を見知つたほどの山^{やまが}賤^つたちは、皆この情ぶかい山男が、愈^{いよいよ}「し
 りや」の国中から退散したことを悟つたれば、西空に屏^{びやうぶ}風^{ふう}を立
 てまはした山々の峰を仰ぐ毎に、限りない名残りが惜しまれて、
 自ら^{おのづか}ため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、
 夕日が山かげに沈まうず時は、^{かならず}必村はづれの一本杉にたかだかと
 よぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやうに、「れぷろ

ぼす」恋しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな声で呼びつづけた。さてその後「れぷろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らうず方々はまづ次のくだりを読ませられい。

二 俄大名のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、難なく「あんちおきや」の城じやう裡りに参つたが、田舎あなの山里とはこと変り、この「あんちおきや」の都と申すは、この頃天あめが下に並びない繁華の土地がらゆゑ、山男ちまたが巷へはいるや否や、見物の男なんにおびただ女夥たしうむらがつて、はては

通行することも出来まじいと思はれた。されば「れぷろぼす」も
 とんと行かうず方角を失うて、人波に腰を揉もまれながら、とある
 大名小路の辻に立ちすくんでしまつたに、折よくそこへ来かかつ
 たは、帝の御輦みかどぎよれんをとりまいた、侍たちの行列ぢや。見物の群ぐんじ
 集ゆはこれに先を追はれて、山男を一人残いた儘まま、見る見る四方
 へ遠のいてしまつた。ぢやによつて「れぷろぼす」は、大象の足
 にまがはうずしたたかな手を大地について、御輦の前に頭を下げ
 ながら、

「これは『れぷろぼす』と申す山男でござるが、唯今『あんちお
 きや』の帝は、天下無双の大將と承り、御奉公申さうずとて、は
 るばるこれまでまかり上つた。」と申し入れた。これよりさき、

帝の同勢も、「れぷろぼす」の姿に胆きもをけして、先手は既に槍薙やりなぎなたぎなたの鞘さやをも払はうずけしきであつたが、この殊勝ことばな言を聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供とも頭がしらの口からその趣をしかじかと帝へ奏そう聞もんした。帝はこれを聞きこし召まされて、

「かほどの大男のことなれば、一いち定ぢやう武勇も人に超えつらう。召し抱へてとらせい。」と、仰せられたれば、格別の詮議とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた。「れぷろぼす」の悦びは申すまでもあるまじい。ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえ昇かくまじい長なが櫃びつ十棹ととさをの宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだかと御供仕つた。まことこの時の「れぷろぼす」

が、山ほほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇体の姿こそ、目ざましいものでおぢやつたらう。

さてこれより「れぷろぼす」は、漆紋の麻袴に朱鞆のなががたな刀を横たへて、朝夕「あんちおきや」の帝の御所を守護す

る役者の身となつたが、幸ここに功名手がらをさいはひ躰さうず時節が到来したと申すは、ほどなく隣国の大軍がこの都を攻めとらうと、

一度に押し寄せて参つたことぢや。元来この隣国の大将は、獅子王をも手打ちにするばんぶふたうと聞えた、万夫不当の剛の者でおぢやれば、

「あんちおきや」の帝とて、なほざりの合戦はなるまじい。ぢやによつて今度の先手は、さき今まゐりながら「れぷろぼす」に仰せ

つけられ、帝は御おんみづか自ら本陣に御輦ぎよれんをすすめて、号令つかさどを司られることとなつた。この采配を承つた「れぷろぼす」が、悦び身にあまりて、足の踏みども覚えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は、「れぷろぼす」をまつさきに、貝か金陣太鼓ひがねの音も勇しう、国ざかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戦ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはう。野原を蔽おほうた旗差物が、俄にはかに波立つたと見てあれば、一度にどつと鬨ときをつくつて、今にも懸け合はさうずけしきに見えた。この時「あんちおきや」の人数の中より、一人悠々と進み出だいたは、別人でもない「れぷろぼす」ぢや。山男が

この日の出で立ちいは、水牛の兜かぶとに南蛮鉄の鎧よろひを着下きいて、刃渡り七尺の大薙刀おほなきなたを柄えみじかにおつとつたれば、さながら城の天主に魂が宿つて、大地も狭しと揺ぎ出いた如くでおぢやる。さるほどに「れぷろぼす」は両軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙はるかに敵勢を招きながら、雷いかづちのやうな声で呼よはつたは、

「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは『あんちおきや』の帝が陣中に、さるものありと知られたる『れぷろぼす』と申す剛の者ぢやかたじけな。辱かたじけなくも今日は先手の大将を承り、ここに軍を出いだしたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ。」と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔「ペ

りして」の豪傑に「ごりあて」と聞えたが、鱗うろこことぢ 綴あか の大鎧あかがねに銅ほこひつきの矛を提げて、百万の大軍を叱陀しつたしたにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣国の精兵たちも、しばしがほどは鳴なりを静めて、出で合うずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大將も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美々しい物の具に三尺の太刀をぬきかざいて、竜馬りゆうまに泡を食はませながら、これも大音に名乗りをあげて、まつしぐらに「れぷろぼす」へ打つてかかつた。なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべながら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからりと捨てて、猿臂ざるびをのばいたと見るほどに、早くも敵の大將を鞍くら壺つぼからひきぬいて、目もはるかな大空へ、礮つぶての如く投げ飛ばいた。その敵の

大将がきりきりと宙に舞ひながら、味方の陣中へどうと落ちて、
 乱離らりこつばひ骨灰になつたのと、「あんちおきや」の同勢が鯨波とぎの声を轟
 かいて、帝の御輦ぎよれんを中にとりこめ、雪崩なだれの如く攻めかかつたの
 とが、間かんに髪はつをも入れまじい、殆ど同時の働きぢや。されば隣国
 の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武具馬具のたぐひをな
 げ捨てながら、四分五裂に落ち失うせてしまつた。まことや「あん
 ちおきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜かぶとくび首くび
 の数ばかりも、一年の日数よりは多かつたと申すことでおぢやる。
 ぢやによつて帝は御悦び斜ならず、目でたく凱歌の裡うちに軍いくさをめ
 ぐらされたが、やがて「れぷろぼす」には大名の位を加へられ、
 その上諸臣にも一々勝利の宴を賜つて、ねんごろに勲功をねぎら

はれた。その勝利の宴を賜つた夜のことと思召おほしめされい。当時国々の形儀かたぎとあつて、その夜も高かうみやう名なな琵琶法師が、大燭台の火の下に節面白げんう絃げんを調じて、今いまむかし昔むかしの合戦のありさまを、手にとる如く物語つた。この時「れぷろぼす」は、かねての大願を成就したことでおぢやれば、涎よだれも垂れようずばかり笑み傾いて、余念もなく珍陀ちんたの酒を酌くみかはいてあつた所に、ふと酔うた眼みかどにもとまつたは、錦の幔幕まんまくを張り渡いた正面の御座にわせられる帝みかどの異な御ふるまひぢや。何故と申せば、檢校けんげうのうたふ物語の中に、悪魔ぢやまと云ふ言葉がおぢやると思へば、帝はあわただしう御手をあげて、必ず十字しるしの印を切らせられた。その御ふるまひが怪けしからずものものしげに見えたれば、「れぷろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ。」と、
 卒爾そつじながら尋ねて見た所がその侍の答へたは、

「総じて悪魔ぢやぼと申すものは、天あめが下の人間をも掌たなごころにのせて弄もてあそぶ、

大量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、悪魔ぢやぼの障しやうげ碍げを払

はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふの

ぢや。」と申した。「れぷろぼす」はこれを聞いて、迂論うろんげに又

問ひ返したは、

「なれど今『あんちおきや』の帝は、天あめが下に並びない大剛の大

将と承つた。されば悪魔ぢやぼも帝の御身には、一指をだに加へまじい

。」と申したが、侍は首をふつて、

「いや、いや、帝も、悪魔ぢやぼほどの御威勢はおぢやるまい。」と答

へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無双の強者つはものは帝ぢやと

承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、悪魔ぢやぼには腰を曲げら

れるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出でて、悪魔ぢやぼの臣

下と相成らうず。」と喚わめきながら、ただちに珍陀ちんたの盃なげうを抛つて、

立ち上らうと致いたれば、一座の侍はさらいでも、「れぷろぼす」

が今度の功名を妬ねたましう思うて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛むほんするわ。」と異口同音ののしに罵り騒いで、やには

に四方八方から搦からめとらうと競ひ立つた。もとより「れぷろぼす」

も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるま

じい。なれどもその夜は珍陀ちんたの酔あひに前後も不覚ていの体ぢやによつて、

しばしがほどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉み合うても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまるんだれば、えたりやおうと侍だちは、いやが上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぷろぼす」を高手小手に括り上げた。帝もことの体たらくを始終残らず御覽ぜられ、

「恩を讐あだで返すにつくいやつめ。　　そうそう　　々土の牢へ投げ入れい。」

と、大いに逆鱗げきりんあつたによつて、あはれや「れぷろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせい地の底の牢舎へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちおきや」の牢内に囚とらはれとなつた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らうず方々は、まづ次のくだりを読ませられい。

三 魔往来のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、未だ繩目もゆるされいで、土の
 牢の暗やみの底へ、投げ入れられたことでおぢやれば、しばしがほど
 は赤子のやうに、唯おうおうと声を上げて、泣き喚わめくより外はお
 りなかつた。その時いづくよりも知らず、緋ひの袍ころもをまとうた学が
 匠くしやうが、忽然こつねんと姿を現あらはいて、やさしげに問ひかけたは、
 「如何いかに『れぷろぼす』。おぬしは何として、かやうな所に居る
 ぞ。」とあつたれば、山男は今更ながら、滝のやうに涙を流いて、
 「それがしは、帝そむに背そむき奉つて、悪魔ぢやほに仕へようずと申したれば、

かやうに牢舎致されたのでおぢやる。おう、おう、おう。」と歎き立てた。学匠はこれを聞いて、再びやさしげに尋ねたは、

「さらばおぬしは、今もなほ悪魔ぢやほに仕へようず望がおりやるか。」と申すに、「れぷろぼす」は頭かうべをたて豎に動かいて、

「今もなほ、仕へようずる。」と答へた。学匠は大いにこの返事を悦んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、

「おぬしの所望は、近頃殊勝千万ぢやによつて、これよりただちに牢舎を赦ゆるいてとらさうずる。」とあつて、身にまとうた緋の袍いましを、「れぷろぼす」が上に蔽うたれば、不思議や総身の縛まめは、悉ことごとくはらりと切れてしまふた。山男の驚きは申すまでもあるまじ

い。されば恐る恐る身を起いて、学匠の顔を見上げながら、いんぎ懇んに礼を為ないて申したは、

「それがしが繩目を赦いてたまはつた御恩は、生々しやうじやうよよ世々

忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる。」と云うた。学匠はこの時又えせ笑ひをして、

「かうすべいに、なじかは難からう。」と申しも果はてず、やにはに

緋の袍の袖をひらいて、「れぷろぼす」を小脇かかに抱いたれば、見

る見る足下が暗うなつて、もの狂ほしい一陣の風が吹き起つたと

思ふほどに、二人は何時いつか宙を踏んで、牢舎を後に飄へうへう々と「あ

んちおきや」の都の夜空へ、火花を飛とばいて舞ひあがつた。まこと

やその時は学匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら

怪しげな大蝙蝠おほかはほりが、黒雲の翼を一文字に飛行ひぎやうする如く見えた
と申す。

されば「れぷろぼす」は愈胆いよいよを消けいて、学匠もろとも中空を射
る矢のやうに翔かけりながら、戦をのく声で尋ねたは、

「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほどな大神だいじん
通つうの博士は、世にも又とあるまじいと覚ゆる。」と申したに、

学匠は忽ち底気味悪いほくそ笑みを洩しながら、わぎとさりげな
い声で答へたは、

「何を隠さう、われらは、天あめが下の人間たなごころを掌もてにのせて弄あそぶ、大力
量の剛の者ぢや。」とあつたによつて、「れぷろぼす」は始めて
学匠の本性が、悪魔ぢやほぢやと申すことに合点がてんが参つた。さるほどに

悪魔ぢやぼはこの問答の間さへ、妖霊星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、「あんちおきや」の都の燈とも火しびも、今ははるかな闇の底に沈みはてて、やがて足もとに浮んで参つたは、音に聞く「えじつと」の沙漠でおぢやらう。幾百里とも知れまじい砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白々と見え渡つた。この時学匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさしながら申したは、「かしこの藁屋わらやには、さる有験うげんの隠者すまひが住居致すまひいて居ると聞いた。まづあの屋根の上に下らうずる。」とあつて、「れぶろぼす」を小脇こわきに抱いた儘まま、とある沙すな山陰やまのあばら家の棟むねへ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

こなたはそのあばら家に行ひすまいて居つた隠者おきなの翁ぢや。折

から夜のふけたのも知らず、あぶらび油火のかすかな光の下で、おんきや御
う経をどくじゆ誦し奉つて居つたが、たちま忽ちえならぬ香風が吹き渡つて、
 雪にもまが紛はうず桜の花が紛々とひるがへいだ翻り出いたと思へば、いづくより
 ともなく一人のけいせい傾城が、べつかふ鼈甲のくわうがい櫛笄を円光の如くさしなひて、
 地獄絵をぬ繡うたうちかけ襠の裳を長々とひきはえながら、天女のやうなこび媚
 をこしら凝して、夢かとばかり眼の前へ現れた。翁はさながら「えじつ
 と」の沙漠が、片時の内にむろかんざき室神崎の廓くるわにほれぼれ変つたとも思ひつらう。
 あまりの不思議さに我を忘れて、しばしがほどはほれぼれ惚々けいせいと傾城
 の姿を見守つて居つたに、相手はやがてはなふぶき花吹雪を身に浴びなが
 ら、ほほゑにつこと微笑んで申したは、

「これは『あんちおきや』の都に隠れもない遊びでおぢやる。近

ごろ御僧のつれづれを慰めまゐらせうと存じたれば、はるばるこ
 れまでまかり下つた。「とあつた。その声さまの美しさは、極樂
 に棲むとやら承つた伽陵頻伽にも劣るまじい。さればさすがに
 有驗うげんの隱者もうかとその手に乗らうとしたが、思へばこの真夜中
 に幾百里とも知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城けいせいなどの来
 よう筈もおぢやらぬ。さては又しても悪魔ぢやまめの悪巧みであらうず
 と心づいたによつて、ひたと御経に眼を曝さらしながら、専念に陀羅
 尼にを誦ずし奉つて居つたに、傾城はかまへてこの隱者の翁を落さう
 と心にきはめつらう。蘭麝らんじやの薫を漂はせた綺羅きらの袂もてあそを弄もびなが
 ら、嫋々たよたよとしたさまで、さも恨めしげに歎いたは、

「如何いかに遊あそびの身とは申せ、千里の山河も厭いとはいで、この沙漠いま

でまかり下つたを、さりとはきよく曲もない御方かな。」と申した。その姿の妙たへにも美しい事は、散りしく桜の花の色さへ消えようずると思はれたが、隠者の翁はへんしん遍身に汗を流いて、降魔の呪文を読みかけ読みかけ、かつふつその悪魔ぢやぼの申す事に耳を借さうず気色すらおりにない。されば傾城もかくてはなるまじいと氣をいらだ苛つたか、つと地獄絵の裳もすそをひるがへ翻して、斜に隠者の膝へとすがつたと思へば、「何としてさほどつれないぞ。」と、よよとばかりに泣いくど口説いた。と見るや否や隠者の翁は、蝟さそりに刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架くるすをかざいて、はたたがみ霹靂ののしの如く罵つたは、「業ごふちく畜、御おんあるじ主『えす・きりしと』の下部しもべに向つて無礼むらいあるまじいぞ。」と申しも果てず、てうと傾城の面おもてを打つた。打たれ

た傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えなくなつて、唯一むらの黒雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫つぶての如く乱れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架くるすに打たれたわ。」と唸うめく声が、次第に家の棟むねにのぼつて消えた。もとより隠者はかうあらうと心に期ごして居つたによつて、この間も秘密の真言しんごんを絶えず声高こわだかに誦ずし奉つたに、見る見る黒雲も薄れれば、桜の花も降らずなつて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが残つたと申す。

なれど隠者は悪魔ぢやほの障碍しやうげが猶なほもあるべいと思つたれば、夜もすがら御経の力にすがり奉つて、目蓋まぶたも合はさいで明あかいたに、やがてしらしら明けと覚しい頃、誰やら柴とほその扉をおとづれるものが

あつたによつて、十字架を片手に立ち出でて見たれば、これは又何ぞや、藁屋の前に蹲つて、恭しげに時儀を致いて居つたは、天から降つたか、地から湧いたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱を流いた空を黒々と肩にかぎつて、隠者の前に頭を下げると、恐る恐る申したは、

「それがしは『れぷろぼす』と申す『しりや』の国の山男でおぢやる。ちかごろふつと悪魔の下部と相成つて、はるばるこの『えじつと』の沙漠まで参つたれど、悪魔も御主『えす・きりしと』とやらの御威光には叶ひ難く、それがし一人を残し置いて、いづくともなく逐天致いた。自体それがしは今天が下に並びない大剛の者を尋ね出して、その身内に仕へようずる志がおぢやる

によつて、何とぞこれより後は不束ふつつかながら、御主『えす・きりしと』の下部の数へ御加へ下されい。」と云うた。隠者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇たたずみながら、俄に眉をひそめて答へたは、

「はてさて、せんない仕宜しぎになられたものかな。総じて悪魔ぢやまの下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうずるまで、御主『えす・きりしと』に知遇し奉る時はござない。」とあつたに、「れぷろぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を経ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決けつちやう定ぢやう致ぢやういた。さればまづ御主『えす・きりしと』の御意みこころに叶ふべい仕業の段々を教へられい。」と申した。所で隠者の翁

と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交された
と申す事でおぢやる。

「ごへんは御おんきやう経の文句を心得られたか。」

「生あいにく憎一字半句の心得もござない。」

「ならば断食は出来申さうず。」

「如何いかなこと、それがしは聞えた大飯食ひでおぢやる。中々断食
などはなるまじい。」

「難儀かな。夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」

「如何なこと、それがしは聞えた大寝坊でおぢやる。中々眠らい
では居られまじい。」

それにはさすがの隠者の翁も、ほとほと言ことばのつき穂さへおぢや

らなんだが、やがて掌たなごころをはたと打つて、したり顔に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河りゅうさがと申す大河がおぢや

る。この河は水みづ嵩かさも多く、流れも矢を射る如くぢやによつて、

日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つた。なれどごへんほどの

大男には、容易たやすく徒かちわた渉りさへならうずる。さればごへんはこれ

よりこの河の渡し守となつて、往来の諸人を渡させられい。おの

れ人に篤あつければ、天主も亦おのれに篤あつからう道理ことわりぢや。」とあ

つたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる。」と

云うた。ぢやによつて隠者の翁も、「れぷろぼす」が殊勝な志を

ことの外よろこ悦んで、

「然さらば唯今、御水おんみづを授け申さうずる。」とあつて、おのれは水みづがめ瓶びんをかい抱きながら、もそもそと藁家の棟へ這ひ上つて、漸やうやく山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下いた。ここに不思議がおぢやつたと申すは、得度とくどの御儀式が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛らんらん々と輝いた真唯中から、何やら雲気がたなびいたかと思へば、忽ちそれが数限りもない四十雀しじふからの群となつて、空に聳そびえた「れぷろぼす」が叢くさむらほどな頭の上へ、ばらばらと舞ひ下つたことぢや。この不思議を見た隠者の翁は、思はず御水を授けようず方角さへも忘れはてて、うつとりと朝日を仰いで居つたが、やがて恭うやうやしく天上を伏し拝むと、家の棟から「れぷろぼす」をさし招いて、

「勿もつ体たいなくも御水を頂かれた上からは、向かう後ご『れぷろぼす』を改めて、『きりしとほろ』と名のらせられい。思ふに天主もごへんの信心を深よう嘉よさせ給ふと見えたれば、万ばん一いつ勤ごん行ぎやうに懈け怠たいあるまじいに於ては、必ひつ定ぢやう遠えんからず御主『えす・きりしと』の御尊体をも拝み奉らうずる。」と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一条を知らうず方々はまづ次のくだりを読ませられい。

四 往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隠者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに参つたれば、まことに濁流滾々ごんごんとして、岸べの青あ蘆をあしを戦そよがせながら、百里の波を翻すありさまは、容易たやすく舟さへ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡およそ三丈あまりもおちやるほどに、河の真唯中を越す時さへ、水は僅に臍ほぞのあたりを渦巻きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、ささやかながら庵いほりを結んで、時折渡りに難なやむと見えた旅人の影が眼に触れれば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる。」と申し入れた。もとより並々の旅人は、山男の恐しげな姿を見ると、如何なる天魔波旬てんまはじゆんかと始はじは胆めも消けいて逃げのいたが、やがてその心根のやさしさもとくと合が点てん

行つて、「然らば御世話に相成らうず。」と、おづおづ「きりしとほろ」の背せなにのぼるが常ぢや。所で「きりしとほろ」は旅人を肩へゆり上げると、毎時いっみぎはも汀の柳を根こぎにしたしたたかな杖をつき立てながら、逆巻く流れをことともせず、ざんざざんざと水を分けて、難なく向うの岸へ渡いた。しかもあの四十雀しじふからは、その間さへ何羽となく、さながら楊花やうくわの飛びちるやうに、絶えず「きりしとほろ」の頭をめぐつて、嬉しげに囀さへづり交かはいたと申す。まことや「きりしとほろ」が信心かたじけなの辱はさには、無心の小鳥も随喜の思にえ堪へななのでおぢやらうず。

かやう致いて「きりしとほろ」は、風雨も厭はず三年が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ねる旅人の数は多うても、

御主「えす・きりしと」らしい御姿には、絶えて一度も知遇せな
んだ。が、その三年目の或夜のこと、折から凄じい嵐があつて、
神鳴りさへおどろと鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、
すぎこし方のことどもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、
忽ち車軸を流す雨を圧して、いたいけな声が響いたは、

「如何に渡し守はおりやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」
と、聞え渡つた。されば「きりしとほろ」は身を起いて、外の闇
夜へ揺ぎ出いだいたに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ
十には足るまじい、みめ清らかな白びやくえ衣のわらんべが、空をつん
ぎいて飛ぶ稲妻の中に、頭を低たれて唯ひとり、佇んで居つたでは
おぢやるまいか。山男は稀有けうの思をないて、千引ちびきの巖にも劣るま

じい大の体をかがめながら、慰めるやうに問ひ尋ねたは、

「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ歸らうとて。」と、もの思はしげな声で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答を聞いても、一向不審は晴れなんだが、何やらその渡りを急ぐ容子ようすがあはれにやさしく覺えたによつて、

「然らば念無う渡さうずる。」と、もろて双手にわらんべをかい抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をてうとついで、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中へ、胆太くもざんぶと身をした浸いた。が、風は黒雲を巻き落いて、息もつかすまじいと吹きど

よもす。雨も川かはづら面を射白いしらまいて、底にも徹とほらうずばかり降り注
 いだ。時折闇をかい破る稲妻の光に見てあれば、浪は一面に湧き
 立ち返つて、宙に舞上る水煙も、さながら無数の天あんぢよ使たちが雪
 の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかりぢや。されば
 さすがの「きりしとほろ」も、今宵はほとほと渡りなやんで、太
 杖にしかとすがりながら、礎いしずゑの朽ちた塔のやうに、幾いくたび度もゆら
 ゆらと立ちすくんだが、雨風よりも更に難儀けしだつたは、怪けしからず
 肩のわらんべが次第に重うなつたことでおぢやる。始はそれもさ
 ばかりに、え堪へまじいとは覚えなんだが、やがて河の真唯中へ
 さしかかつたと思ふほどに、白衣のわらんべが重みは愈いよ増まいて、
 今は恰あたかも大磬だいばんじやく石いしを負ひないてゐるかと思はれた。所で遂には

「きりしとほろ」も、あまりの重さに押し伏されて、所詮はこ
 の流沙河に命を殞すべいと覚悟したが、ふと耳にはいつて来たは、
 例の聞き慣れた四十雀の声ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥
 が飛ばうぞと訝りながら、頭を擡げて空を見たれば、不思議やわ
 らんべの面をめぐつて、三日月ほどな金光が燦爛と円く輝いた
 に、四十雀はみな嵐をもともせず、その金光のほとりに近く、
 紛々と躍り狂うて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄
 々しいに、おのれは人間と生まれながら、なじかは三年の勤
 行を一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓にも紛はうず
 髪をさつさつと空に吹き乱いて、寄せては返す荒波に乳のあたり
 まで洗はせながら、太杖も折れよとつき固めて、必死に目ざす岸

へと急いだ。

それが凡そ一時ひとときあまり、四苦八苦の内に続いたでおぢやらう。

「きりしとほろ」は漸やうやく向うの岸へ、戦ひ疲れた獅子王のけしきで、喘あへぎ喘あへぎよろめき上ると、柳の太杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息をついて申したは、

「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海うみやまはか山量り知れま

じいぞ。」とあつたに、わらんべはにつこと微笑ほほゑんで、頭上の金

光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら、山男の顔を仰ぎ見て、さも懐しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身ににな荷うた『えす・きりしと』を負ひないたのぢや。」と、鈴を

振るやうな声で申した。……

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山男がむくつ
 けい姿を見せずなつた。唯後に残つたは、向うの岸の砂にさいた、
 したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、不思
 議うるはや麗くれなるしい紅の薔薇の花が、薰かぐはしく咲き誇つて居つたと申す。さ
 れば馬太またいの御おんきやう経しるにも記いた如く「心の貧しいものは仕合せぢ
 や。一いちぢやう定天国はその人のものとならうずる。」

(大正八年四月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系」芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年6月22日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

きりしとほろ上人伝

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>